

シウマイ文化と

よこはま

洋菓子文化

こうべ



田村 明

<都市計画家>

さて、何かおみやげでも買おうか、という段になると、神戸という町はそれらしい風格のある物をいろいろとそなえていたものである。現在は全国的に均一化が進み、どこへいっても名店街が並んで、確かに便利にはなったけれども、その土地土地の特色が無くなって淋しくなってしまった。だからどこが本家やらハッキリしないものが多いのだけれど、神戸といえば、モロゾフ、ユーハイム、風月堂、ヒロタといった洋菓子店のことが浮んでくる。中でもユーハイムのピラミッド・ケーキや、風月堂のゴルフなど、いかにも神戸的というか、ハイカラ洋風趣味の尖端をゆくものが、適当に日本的なアレンジが加えられて、センスのよいモダニズムの代表みたいな顔をしている。

そのほか神戸の三ツ輪の牛などは、神戸牛として名がとおっている。百年前初めて牛肉をたべて驚嘆した日本人が、牛なべを発明し、日本的なキメの細さで、牛の加工をおこなって神戸牛として定着させるなど、文明開化時代の華^{はな}を現代に受けついで遺産ともいうべきであろう。

ところが横浜となると、一体何をみやげにしたらいのだろう。同じ国際貿易都市として、二大開港場として発展し、国際色と異国趣味を売物にしたが、横浜は文明開化時代の遺産を十分に定着させることができなかつたようである。東京の吸

引力があまり強すぎたせいなのだろうか、欧風化の精髓はみな東京へ流れていってしまった。横浜文化という言葉には何かほの暗い遠い追憶の日の、ゆれるガス灯の燈を思いをみるような気がする。そんな横浜の歴史は明治時代に吹きとんでしまったようである。横浜の名は国際的には鳴りひびいているが、横浜文化は歴史の中に埋没してしまったのであろうか。

その中でやっと見つけたのが、横浜のシウマイである。横浜駅弁に何か土地の名物がほしいという苦心は、昭和3年に横浜崎陽軒のシウマイとなって現れた。もちろんシウマイは方々に名物としてあったわけだが、冷えるとうまくないので、流通範囲が限られている。そこで駅弁用にするためには、冷えても味が変らないというところに独特の製法上の苦心があったようであるが、その結果、横浜崎陽軒のシウマイは全国各地へ運ばれて、横浜の名を高からしめたわけである。関東各地のドライブ・インなどには必ずといってよいほど横浜のシウマイがある。たしかにシウマイ文化においては、全国の、少なくとも関東における中心は横浜であろう。

もともとシウマイは料理というよりも、点心の部類で、菓子に近い性格だったようであるが、日本人のアッサリ好み、コッテリした中華料理の中では、シウマイを歓迎したわけである。同時に値段も手頃で、庶民的であるところから、日本の中華料理の代表格になったわけである。全国に名物シウマイは多いけれど、これだけの普及力をもったのには、崎陽軒シウマイの力は大きな役割りを果たしたであろう。中国の影響は歴史的にも長く受けながら、明治以後では、案外シウマイあたりがその筆頭になるのではなかろうか。

片や神戸の洋菓子、片や横浜のシウマイ、この二つに同じ国際貿易港として発展し、同じような国際色、異国趣味をもちながら二つの都市の文化性

をかなり特色づけているように思われる。神戸の洋菓子はどこまでも上品に、ちょっとシャレた気持で、芦屋夫人などが、香り高い紅茶を口にして居る図が想像できる。しかし横浜のシウマイなら、そんなお上品な食べ方より、もっと実質本位、だれでも気安くパクつくといった庶民性が、その持味である。ハマといった気安い呼び名もシウマイの庶民性と一脈通ずるものがあるようで、ハマッ子といった一種の新時代の威勢のよさに対して、神戸っ子という言葉はあまり聞かないようである。

私は以前、東京と大阪を比較して、「コーヒー文化」と、「おこのみやき文化」という言葉で呼んだことがある。大阪では「コーヒー」は、「コーヒ」としかいわない。それは似て非なるもので、コーヒーなどとハイカラくさい、おていさい的な東京流に対して、大阪はていさいはともかく、実質で十分かせぐおこのみやきが中心におかれる。大阪では、疑似東京文化はせいぜい「コーヒ」という存在しか与えられない。そんなことを書いた記憶があるが、いまここで横浜文化と神戸文化というものが存在しているとすれば、シウマイ文化と、洋菓子文化というのは、ここでは位置の逆転がみられるのはおもしろい現象である。ハイカラ趣味、近代趣味を代表する東京のコーヒーが、横浜では、庶民性を代表する実質主義のシウマイにおきかえられ、一方、なりふりかまわない大阪の実質主義、庶民主義が、同じ関西の神戸では、ハイカラ趣味、近代趣味の洋菓子におきかえられてしまうのである。つまり明治初期に同じような条件で出発しながら、神戸が着々と欧風文化を中心に、神戸らしい高級国際色をつくっていったのに対して、横浜はむしろ庶民的国際色をその特色としたのである。もちろん、弁天町、元町といった異国情緒のハイクラスの町がなかったわけではないが、ど

ちらかという東京の下風に立ってきたのが横浜である。

ところが神戸の場合は、大阪に対してむしろ近代性と欧風文化では、優位を主張する。阪神間の西宮、芦屋、御影など地形的な好条件にもめぐまれて大阪の最高住宅地として発展してきた。このことは大阪の仕事の場、住いは阪神間、買物やあそびは神戸といったパターンがある程度成立したのである。もっと広く京都をも含んで、この関西の都市の間には、かなりハッキリした機能分担がみられる。その上、六甲山系という絶好なレクリエーションの場と、地形的に明快でコンパクトな都市構成が、神戸文化を独特のものとして保持してきたといえるだろう。

横浜は残念ながら地形的にも明快さを欠き、六甲のような決定打もなく、地域もべたべた無性格に広がった。しかし何よりも東京という貪欲なウルトラ・マンモス都市が、何もかにも東京へ吸収してしまったのが、横浜文化を神戸とはかなり異った様相にしてしまったのである。横浜の庶民性はそれでよい。しかしあの活力はどこへいったのだろう。神戸では市民同友会、市民山之会、KCCなど活発な地域文化活動がみられるのに、横浜は巨大な無性格都市トウキョウの一分区にすぎず、しかもそれがバラバラで一つのまとまりをもちにくい。神戸の町はどこからでも山が見え少し上げればすぐ海が見える。横浜のミナトは大半の市民とは何の関係もない。こんな何気ない、風物と市民の接触のちがいが、市民意識の形成、ひいては市民文化の形成に大きな差異が生ずるのではなからうか。その点横浜は大きくなりすぎたのかもしれない。せめて町の一体感をもたせる都市構成が検討されてよいだろう。

本来、横浜文化、神戸文化というけれど、そうしたものが成立つ余地があるかどうかは現在では極

めて疑問である。都市の集中巨大化、全国的なマス・メディアの発達による文化の均等化は、上方文化と江戸文化の伝統をつぐ関東と関西文化さえ、均質化しつつある現状で、横浜文化、神戸文化という言葉は独善にすぎるのかもしれない。現に横浜文化という意識はほとんどないであろう。しかし、もしそのような全国均一の無性格な文化が、灰色にべったり日本中をぬりつぶそうとするとき、神戸にみられるような文化運動は大都市では珍しい現象である。均一的に知ることは、何も知らないと同じであり、均一に持つことは何も持たないのと同じである。そのような灰色の時代に対して、横浜文化という言葉が再び特色をもって語られる日があるなら、それはかつてのガス灯の時代が、光の華であったように、日本文化に新しい光を与える日となるであろう。

横浜文化論

分にすぎた背伸びを



吉田考古麿

<合唱指揮者>

日本にヨーロッパ音楽が移入されてからまだ1世紀に満たない。しかもヨーロッパでは何百年もかけて進展してきた音楽の成果がいっぺんに流れ込んだのだ。音楽だけが、いわば抽象的にとらえられて、それを支えているもの——西洋の音楽観——を無視してしまったから、いまだに「洋楽」は借りものといった意識がなくなっていない。ひろく「音楽」という意味でなら、日本にも「邦楽」の長い歴史と伝統がある。しかしその違いは、音楽が一国の文化の中で占める精神的な価値についての認識の差だといってよい。

最近、「生活の中に音楽を」ということがよくいわれている。また一方では専門家の中に「無意味な音楽の氾濫」を歎く声も多くなった。たしかに「生活」に結びついた音楽というのは、西洋の音楽観に一歩近づいたことになるし、少なくとも、日本のいままでの音楽の中に不足していたものの一つであった。しかしその理想的なあり方というのは、一部の専門家が指摘していたように、年中音楽が鳴りっぱなしという意味ではない。であるから日常生活のいたるところに音楽が満ち溢れている状態というのは本当は半分の真理でしかないわけだ。西洋では他人の生活を侵害しないという大原則と、生活第一主義はちゃんと守られている。日本ではどうだろう。最近の航空事故のテレビ実